

土木図書館におけるデジタルライブラリーへの取り組み（その6）

ーレファレンスサービスについてー

土木学会附属土木図書館 正会員 坂本真至

1. はじめに

土木図書館には、HP 上の問い合わせフォーム（図-1）、電話、メール、fax、封書などで様々な問い合わせや質問が寄せられる。その内容は多岐に渡るが、休館日や開館時間、所在地や交通アクセス、文献名など書誌情報が既知の資料の所蔵有無などのシンプルな内容のほか、ある程度時間をかけて文献調査を必要とする内容が少なからず含まれている。後者の文献調査から一定の回答を質問者に提供するまでのプロセスを「レファレンス（参考調査）」サービスと称する。図書館機能の中では重要な要素を占め、図書館司書の存在価値を示す指標となるが、「経験と勘」によるところが大きく定量化が難しい領域でもあることから、一般には認知しがたい部分でもあった。また10進分類の全てを網羅する公共図書館と特定の分類分野に特化した土木図書館のような専門図書館では、自ずから求められる内容やレベルも異なってくる。

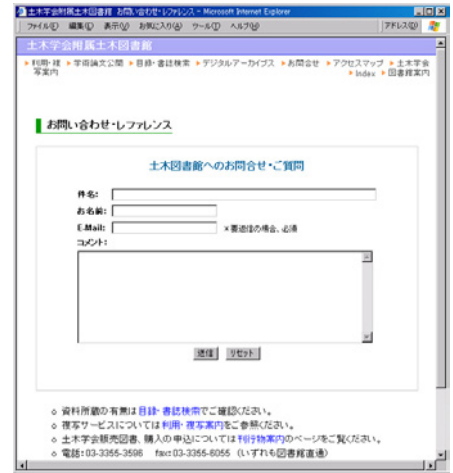


図-1 土木図書館お問い合わせフォーム画面

ここでは、土木図書館におけるレファレンスサービスの実態と時代的な変遷過程を、特に情報化の進展度合との関係で考察する。

2. データベースの整備とレファレンス・レベルの変遷

土木図書館における文献情報のDB化・検索システムの構築は、表-1に示すように、1993（平成5）年に蔵書目録DB、1996（平成8）年に「土木学会論文集」書誌目録DB、1998（平成10）年インターネットに対応し、「土木学会誌」「年次学術講演概要集」「各委員会論文集」書誌目録DBが整備された。

(1) DB整備以前のレファレンス

今では隔世の感があるが、書誌目録DB整備以前のレファレンスと言えば、もっぱら「目次」タイトルに出てくる特定のキーワードを、目視でしらみつぶしに探すという方法しかなかった。

専門雑誌の毎月ごとの目次をファイリングし、年間総目次を創刊号から網羅的に整理することは、図書館の基本業務であった。土木学会誌には毎号、関連学協会誌の目次紹介ページが掲載されていて、大変助かった（これらの編集は図書館委員会の前身である文献調査委員会が担当していた）。また、各専門分野の委員会や研究者が出していたテーマ別の文献目次集、解題、レビューなどの文献情報は重宝した。これらを以下に収集できているかも、専門図書館の重要な役割であった。一旦目的の論文が見つかったなら、その論文の参考文献をもとに触手を広げていくという方法も有効だった。

(2) DB整備以降のレファレンス

キーワードを入れると、とにかく文献一覧が表示される、というのは画期的なことであった。DB初期には検索スピード（処理能力）が遅く、index化していない（シーケンシャルな）検索では、数千件のタイトルを検索するにも数分またされることは当たり前だったが、目視でリストをあたるのに比べれば雲泥の差であった。その後のインターネットの急速な普及により、また検索エンジンの超高度化により、<検索>という図書館専門用語が一般用語として使われる時代になっている。誰でも、思いついた言葉を入力すれば、関連の記事や文献が表示される、ということが当たり前になってしまった。

表-1 土木図書館DB化の進展

年	事項
1993(平成5)	・土木図書館蔵書目録DBの整備 ・電話回線によるonline検索システム構築 ・学術情報センターとの連携 （「年次学術講演概要集」書誌データの提供と学情検索システムの会員利用を実現）
1994(平成6)	・セミナー「電子図書館の計画と実現～近未来の土木図書館の姿を求めて」を開催
1996(平成8)	・「土木学会論文集」書誌目録DBの整備
1998(平成10)	・インターネットに対応し土木図書館HP開設、web検索システムの構築 ・「土木学会誌」「年次学術講演概要集」「各委員会論文集」書誌目録DBの整備
2002(平成14)	・土木デジタルアーカイブスの構築 （貴重図書雑誌全文・写真等の公開を開始）
2009(平成21)	・学術論文公開の運用開始

注)蔵書目録とは冊子の書名(雑誌名)、著者名、発行所等の書誌情報の一覧を指し、書誌目録とは論文個々のタイトル、著者名、巻号頁などの書誌情報の一覧を指す。

キーワード：レファレンス，書誌データベース，デジタルライブラリー

連絡先：〒160-0004 東京都新宿区四谷1 Tel 03-3355-3596 Fax 03-3355-6055 Email:sakamoto@jsce.or.jp

つまり、(1)で述べたレファレンスは図書館司書が専門性を持ってやるべき仕事ではなくなった、とも言い得る。では、この段階でのレファレンスとはどうあるべきなのか。一般的に述べることは手に余るが、個人的な体験として言えば、専門図書館のレファレンスの醍醐味は、「レファレンス連鎖」ともいべき主題連関が同時期に、あるいは時期を隔てて起こることであり、図書館司書が「あちら」(の資料)と「こちら」(の資料)をつなげる結節点の役割であることがよく理解される。次に、その一端を紹介する。

3. レファレンス連鎖の事例：バルトン—後藤新平—近代写真技術—濃尾地震—根尾谷断層—浅草 12 階

バルトン (W.K.Burton. 1855-1899) について調べるきっかけは、江戸東京博物館からの照会だった。『東京の下水道・100年のあゆみ』掲載のバルトンの写真の出典が土木図書館とあるので、後藤新平生誕 150 年企画展への転載許可を求めてきたのだ。当館にある関連文献を丹念にみていくと稲場紀久雄著『都市の医師—浜野弥四郎の軌跡』(水道産業新聞社, 1993)の中の写真と同じものであることが判明した。同書はバルトンと浜野弥四郎(東京帝大でバルトンに学び、後藤新平に請われてバルトンとともに台湾水道建設にあたる. 1869-1932)、また後藤新平との交流を詳細に描いた評伝で、著者は「日本下水文化研究会」でバルトンの研究を継続的にされていることもわかった。著者に連絡を取り了解を得たうえで、同博物館に照会して直接許諾を得て頂いた。ここまでではよくあるケースだが、バルトンの話はさらにつながっていく。同研究会発行図書に、ミルンとバルトンの共著による『The GREAT EARTHQUAKE of JAPAN 1891』が紹介されている。濃尾震災を克明に写した記録写真集(『写真集三大地震と人々の暮らし』日本下水文化研究会, 1996 所収)で、著名な「根尾谷断層」の写真を含む。しかし、当館所蔵の同写真集(『The GREAT EARTHQUAKE of JAPAN 1891』John Milne, W.K.Burton, 1892, 1992 年梅村魁・青山博の復刻版。原本は武藤清旧蔵)にはこの「根尾谷断層」の写真が入っていない。これについては常々疑問に思っていた。バルトンは帝国大学工科大学教授(衛生工学)としてイギリスから招聘されたが、英国王立写真協会会員でもあり近代写真技術を日本に紹介した人物でもあった。1891(明治 24)年濃尾地震発生直後に地震学者ミルンと組んで被害調査のため現地入りし、多くの貴重な写真を撮影したのだが、なぜ地球科学のメッカといわれ内外の文献にも数多く引用されている「根尾谷断層」の写真が当館復刻版に入っていないのか?その謎は、震災関連資料集収集の過程で、村松郁栄他著『濃尾地震と根尾谷断層帯』(古今書院, 2002)により判明した。村松はコラムの中で、比企忠(京都帝国大学教授. 1866-1927)が写真展に同写真集を出品したときの説明の一部を引用している。

「出品の写真帖は工科大学お雇い技師で衛生工学を講義しておられたバートン氏が写されたものを時の有名なる写真師小川一真氏がコロタイプ版にしたものであります。当時私も同行していたため、第 3 葉;名古屋枇杷島町堤防の破裂したところに標尺として立たされました。写真の中央より少し右で材木の 2 本ある少し上に立っているのが私、理科大学地質学科一年生の俤であります。お笑い願いたし。」(同書 pp.28-29「コラム1 小藤論文の写真は誰が撮ったか」)。

その写真を小藤文次郎(東京帝国大学教授. 1856-1935)は 1892 年に自分の論文に掲載し世界的に有名になった。しかし、村松は同写真集 1892 年初版(当館所蔵本はこれに該当)にこの断層写真がなく、1893 年第 2 版(「日本下水文化研究会」復刻版がこれに該当)で出現していることこそ、バルトン撮影を証明するものだ、としている。

「報告書の最大の目玉であるこの写真を最初に発表するのは東京大学の日本人教授でなければならなかったであろう。」(同上)

稲場も、バルトンは自作以外には撮影者明記が原則で、当該写真無記名=バルトン撮影を示す、と証言した。

また、比企が指摘する通り、同写真集表紙には小川一真が製版担当(「plates by K.Ogawa」と記載されている。小川はバルトンの指導の下に日本写真協会を創立するなど、写真製版技術を飛躍的に向上させた。1891 年には、浅草 12 階で「百美人」写真展を開催、この設計はバルトンと当時の新聞記事にあるが詳細は不明である。日本で初めてのエレベーター導入など話題性はあるものの、建築畑からは正当な評価はなく毀誉褒貶の多い浅草 12 階は、東京・浅草の風俗の象徴としてもはやされたが、関東大震災で被災し取り壊されることになる。

4. 今後の課題

土木図書館におけるレファレンスの質は、上記の考察の通り、情報化を契機に大きく変化した。情報通信技術の高度化による検索ツールやデータベースなどの進化はとどまることを知らないが、図書館司書はその出自からして、この分野での親和性はもともと高く、また生き残るためには、それをマスターすることが必須となる。それに加えて、上記で示した「連鎖」の化学反応こそが図書館司書の存在価値を指し示すものとなろう。

参考文献:「れふぁれんす三題噺 179: レファレンスは連鎖する—結節点としての図書館司書」図書館雑誌, 2011, vol.105no.4